

fig. 1 調査位置図(奈良市作成「平城京条坊復原図」による)

I 序 章

1 調査に至る経過

この報告は、奈良市杏町197-1他7筆の地における開発行為の事前発掘調査にかかわるものである。開発当事者である株式会社スギノテクノからの発掘届出にもとづき、奈良県教育委員会を中心として各方面と協議を行った。開発予定地は面積が17,590㎡と広大であり、平城京左京八条一坊三坪と六坪にわたること、さらに朱雀大路に東接する地であることから、重要な遺構の存在が予想され、発掘調査を必要とするとの結論に達した。奈良県教育委員会から株式会社スギノテクノへその旨を申し入れた結果、その協力を得、建物の建設予定地約3,000㎡を主な対象地として調査を行うこととなった。調査は、奈良県教育委員会の依頼を受け、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が実施した。

2 周辺の地形と過去の調査成果 (fig.1・2、PL.2・3)

調査地の周辺は、工場や住宅の建設が著しく進行しているが、以前は水田が広がっていた。付近の水田面は標高53.2m前後で、南と西に漸次低くなる。調査地の北方約300mでは、岩井川が平城京の七条大路上を西流し、佐保川に合流する。佐保川は岩井川との合流点で南西から南に方向をかえ、調査地のすぐ西側、平城京の朱雀大路上を流れる。調査地周辺では東西、あるいは南北に連なる水田から条坊復原が行われている。調査地内の三・六坪間の小路は水路にその痕跡をとどめている程度であるが、六坪にあたる地域の字名は「六ノ坪」である。また、調査地の西・北・南はそれぞれ朱雀大路、五・六坪々境小路に接している。

過去、平城京と南辺部における発掘調査 (fig.2) は羅城門地域 (1)、九条大路沿い (2・3)、左京八条一坊 (4)、同八条三坊 (5・6)、同九条三坊 (7)、右京八条一坊 (8) 等で実施され、大きな成果をあげられている。すなわち、大路や小路の検出によって平城京の条坊復原が次第に精緻になるとともに、京南辺部においても1坪分の宅地班給 (左京九条三坊三坪) や官の漆器工房 (右京八条一坊十一坪) が存在した可能性が示された。また、左京八・九条三坊と、右京八条一坊においては、それぞれ幅約10mの堀河が検出され、京内における物資運搬の解明に恰好の資料が得られた。さらに、これらの堀河や九条大路側溝では人形などの呪術に関する遺物の出土が顕著であり、平城京内における祭祀研究の一助となっている。

註1 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972

註2 奈良国立文化財研究所『平城京九条大路』1981 奈良市教育委員会『市道九条線関係遺跡発掘調査概報』I・II 1983・1984

註3 1972年奈良国立文化財研究所発掘 (十坪)

註4 奈良県『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976、奈良国立文化財研究所『平城京東堀河』1983

註5 奈良国立文化財研究所『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983

註6 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984



fig.2 平城京南辺部の調査位置図

3 調査の概要

発掘調査は平城京左京八条一坊三坪と六坪にまたがる東西約80 m、南北約39 mの中央調査区と、朱雀大路近くに設定した東西約12 m、南北約4 mの北西調査区、八条々間路上に設定した南北約25 m、東西約3 mの北東調査区とで行った。奈良国立文化財研究所が設定している平城京の地区割^{註1}では、中央調査区が6 A H L - Q区、北西調査区が6 A H L - R区、北東調査区が6 A H L - R・S区になる (fig. 5)。

調査は、昭和59年8月7日から厚さ約1 mの盛土を重機によって排土することから始めた。8月17日には排土がほぼ完了し、中央調査区から本格的な発掘調査に入った。遺構の検出が完了したのは10月4日で、空中写真測量ののち補足調査を行ない、10月26日に調査を終了した。調査面積は約3,300 m²で、開発総面積17,590 m²の約2割にあたる。

調査の結果、古墳時代、奈良時代及び中世の遺構を検出し、多量の遺物を発掘した。

まず、奈良時代では八条々間路と八条一坊三・六坪の坪境小路の存在を確認するとともに、各坪内の利用状況の一部を明らかにすることができた。特筆すべき成果としては、三・六坪とも建物は奈良時代を通じてほぼ4時期の変遷が認められること、三坪では坪の中央やや東寄りに池状の遺構があり、1坪もしくはそれ以上の占地在考えられること、六坪では西辺の中央部に広場があり、井戸を伴うことなどを指摘できる。なお、井戸は底に網代を敷いたもので稀有の発見となった。

次に、中世の遺構としては、三・六坪の坪境小路上を正南流する幅約22 m、深さ約2.8 mの河川を検出し、この河川が人為的なものであること、また調査地の西方約80 mの地点を流れる佐保川がかつてはこの位置にあったことをほぼ確認できた。

古墳時代では中央調査区の西半部を中心に5・6世紀の多数の掘立柱建物と若干の竪穴住居跡、さらには堰を伴う河川及び数条の溝を検出した。建物は大きく4時期の変遷があり、調査例の少ない古墳時代集落の研究に恰好の資料を得ることができた。

奈良時代の遺物は主に土器で、三坪の池状遺構と六坪の土壌からまとまって出土した。他に100点をこえる墨書土器や若干の硯・土馬もある。また、柱穴からは漆紙文書の残る曲物容器が出土した。瓦は比較的少量であった。中世の遺物としては河川から出土した木製板卒塔婆が1点ある程度だが、古墳時代の遺物は多い。主に土器で、河川からまとまって出土した。

註1 奈良国立文化財研究所『平城京左京三條二坊』1975



fig. 3 古墳時代河川の発掘状況



fig. 4 建物（六坪）の検出状況

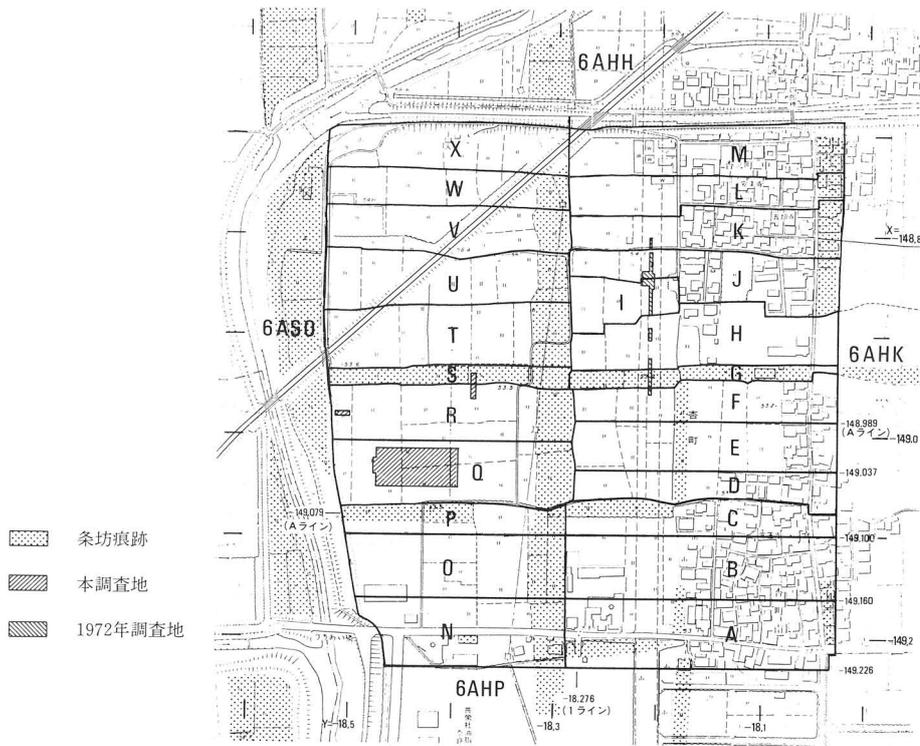
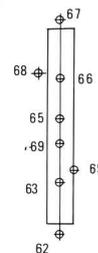
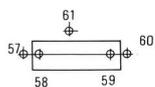


fig. 5 左京八条一坊 (6AHL) 地区割 1 : 6000

番号	X	Y	Z	番号	X	Y	Z
1	-149,009,400	-18,469,255	54,354	45	-149,041,563	-18,405,692	52,266
3	"	-18,441,234	54,303	48	-149,051,571	-18,469,255	54,213
5	"	-18,413,552	54,324	50	"	-18,451,156	54,387
8	-149,014,562	-18,458,990	52,190	52	"	-18,433,268	54,388
12	"	-18,424,578	52,576	54	"	-18,415,141	54,376
16	"	-18,393,101	54,203	56	"	-18,397,089	54,138
25	-149,023,561	-18,404,925	52,609	57	-148,978,327	-18,512,953	54,008
28	-149,032,655	-18,478,400	54,206	59	"	-18,501,602	52,551
32	"	-18,441,809	52,191	62	-148,966,297	-18,380,555	54,104
39	-149,041,563	-18,460,245	52,376	65	-148,950,418	"	53,774
43	"	-18,424,658	52,485	67	-148,936,670	"	54,385



tab. 1 標定点座標値一覧表

撮影仕様

- 撮影日時 1984. 10. 5
- 飛行機 川崎ベルKH4
- カメラ ツァイスRMK-A
- レンズ 焦点距離150mm
- フィルム コダックTRI-X
- 撮影縮尺 1/250, 1/550, 1/850
- 撮影高度 37.5m, 82.5m, 127.5m
- 露出 1/500
- 絞り 8
- 変歪修正機 ツァイスSEG-V
- プリンター 電子プリンター
マークII
- 現像機 パーサマツ11C型

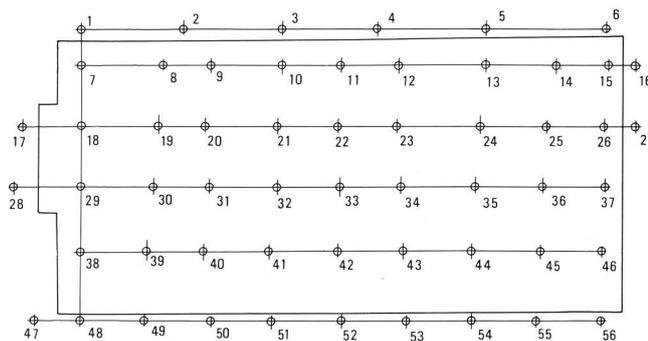


fig. 6 空中写真測量標定点配置図